群教セ	I01 － 04
	平24.246集

知的障害特別支援学校小学部児童のキャリア発達を促す支援の工夫

── 遊びの指導における「アセスメントシート」・「支援シート」を活用して ──

長期研修員　　山崎　千賀子

《研究の概要》

本研究は、知的障害特別支援学校小学部において、キャリア教育の視点を取り入れた遊びの指導を通して、児童のキャリア発達を促すことを目指したものである。まず、「アセスメントシート」を活用して児童のキャリア発達を把握し、遊びの指導との関連性を明確にし、年間の目標や題材の目標を設定した。次に、遊びの指導での支援方法を「支援シート」を活用して考え、児童のキャリア発達を促す支援の工夫を図った。

キーワード　【特別支援教育　知的障害　特別支援学校　キャリア教育　遊びの指導】

Ⅰ　主題設定の理由

我が国でキャリア教育が導入されてきた背景には、若者の勤労観・職業観・職業意識の希薄さ、フリーターやニート、就職後３年以内での離職者の増加など、社会的な問題が挙げられる。「キャリア教育」という言葉が文部科学行政関係で初めて明記されたのは、平成11年中央教育審議会の答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」である。その中で「学校生活と職業生活の接続の改善のための具体的方策として、キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」とし、キャリア教育の必要性が提言された。そして、国立教育政策研究所生徒指導研究センターの「キャリア教育推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」、文部科学省による「小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き」によって「キャリア」や「キャリア教育」の定義が明確に示されている。

特別支援学校においては、平成21年の学習指導要領改訂の柱の一つとして、「自立と社会参加に向けた職業教育の充実」が挙げられ、キャリア教育推進の重要性が示された。障害のある児童生徒の自立や社会参加を推進することを目標に掲げ、現在キャリア教育を学校課題として取り上げる特別支援学校が増加しており、キャリア教育の必要性や意義の理解が高まってきている。しかし、「キャリア」という言葉のもつ意味は多様であり、その言葉からイメージされるものは、中央省庁の官僚やキャリアウーマン、キャリアアップなど、レベルが高いものという誤解がある。また、キャリア教育を職業教育・進路指導と同意義にとらえるイメージから、高等部や中学部で行う作業学習が中心になりがちである。さらに、キャリア教育として新たに特別な教育をする必要があるのではないかなど、特別支援学校ではキャリア教育への一人一人の教師の受け止め方、取組の内容にばらつきが見られるのではないかと考える。

キャリア教育は、児童生徒の過去の経験やはぐくんできた能力を今と、さらに将来へつなげ「生きる力」をはぐくむものであり、学校の教育活動全体を通して、長期的な視野に立ち系統的に取り組む必要がある。小学部では、日常生活の指導や遊びの指導、生活単元学習など、キャリア教育と関連のある様々な教育活動を行っている。そこで、本研究では、知的障害特別支援学校小学部において、キャリア教育の視点を取り入れた遊びの指導を通して児童のキャリア発達を促したいと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

知的障害特別支援学校小学部における遊びの指導において、「アセスメントシート」・「支援シート」の作成・活用を通して授業実践を行うことにより、児童のキャリア発達を促す支援方法の有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　児童の実態を把握する過程では、キャリア教育の視点から作成した「アセスメントシート」を活用することにより、児童のキャリア発達にかかわる具体的な基礎的能力を的確に把握できるであろう。

2　授業を行う過程では、まず、児童の実態に対応した遊びの指導の年間の目標や題材の目標をキャリア発達との関連性を確認しながら設定する。そして、「支援シート」を活用し、主に「場の設定」、「教材・遊具」、「教師の働きかけ」の三つの観点から支援方法を考えることにより、児童のキャリア発達を促すことができるであろう。

3　検証を行う過程では、授業実践の記録を基に、遊びの指導で児童がどのように活動したかを目標と照らし合わせて振り返ることで、取り入れた支援方法が児童のキャリア発達を促すために有効だったかを検証できるであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　基本的な考え

(1)　知的障害特別支援学校におけるキャリア教育

キャリア教育は、児童生徒の過去の経験やはぐくんできた能力を今と、さらに将来へとつなげて「生きる力」をはぐくむものである。知的障害特別支援学校では、児童生徒が将来自分なりの役割をもって社会の一員となり、より良く、生き生きと生活していくために必要な基礎的能力を、一人一人の障害や特性を考慮してキャリア教育に取り組む必要がある。特に、小学部は将来の生活の土台となる能力学習の始まりの時期であり、それぞれの活動における意欲・態度をはぐくむことが大切である。

(2)　キャリア発達

人は一人一人違う個性をもっており、その人を取り巻く生活環境、人とのつながり方、経験してきたこと・はぐくんできた能力など、皆個々に異なっている。「キャリア」は、職業・職歴だけではなく、人それぞれがどのように生きてきたか、そして、今をどのように生き、将来どのように生きていくかにかかわるすべての経験である。ワークキャリアも含め、その人独自のライフキャリアに応じて、社会の中で果たすべき役割や生き方をとらえ、個に応じたキャリアをはぐくんでいく一つ一つの過程がキャリア発達であると考える。

(3)　キャリア発達にかかわる四つの能力

①　人間関係形成能力

知的障害のある児童にとって、人とつながることは難しい課題である。人間関係を形成する上で大切なのは、自分や他者について知ること、互いに認め合うこと、共同・協働する能力、コミュニケーション能力などである。小学部段階では、まず自分が好きなことや嫌いなことを見つけられること、友達のよいところが分かること、友達と協力して学習や活動に取り組めることなどが挙げられる。コミュニケーション能力は、あいさつや返事をすることを初めとして、人とのかかわりや集団参加、人との共同・協働など、それぞれを関連させて身に付けていくことが大切である。

②　情報活用能力

人は、様々な情報に囲まれて生活している。小学部段階では、児童が乳幼児期に過ごしてきた環境から初めて学校生活をスタートさせるに当たり、まず学校生活の中での情報を理解して活動に取り組む能力を身に付ける必要がある。そこには毎日の日課表や活動の手順表、写真・絵カードが示す情報、文字や音声言語による情報など、様々な情報が含まれる。そして、学校生活から家庭生活、商店や公共施設・公共交通機関などの利用も含めた地域での生活へと徐々に範囲を広げながら情報活用能力を身に付けると共に、身近な生活や遊びでのきまりやマナーを守って活動できる能力をは

ぐくむことも大切である。

また、児童が社会で生活していくためには、身近な生活の中で目にする仕事に興味・関心をもつことも大切である。将来の働く生活につなげるために、学校では係活動や当番活動、手伝いなどの活動において、児童が自分の役割や活動内容を理解して取り組むことが挙げられる。さらに学校での取組が家庭でも生かされるように、家庭と連携して取り組んでいく。それらの経験を土台として、働くことや進路・職業に興味・関心をもち、将来の生き方の選択に生かしていくことが大切である。

③　将来設計能力

将来設計能力は、職業生活を含め、将来の生活に必要な基礎的能力を身に付け、夢や希望をもって将来の生き方や生活を考えていくためのものである。小学部段階では、食事や排せつ、生活リズムを整えること、健康管理、時間の管理、体力づくり、道具の使い方などを家庭と協力しながら、児童の実態に応じた支援を工夫して取り組んでいく。基本的生活習慣は、技能を身に付けるだけでなく、将来の生活を見据えてなるべく少ない支援で自分でできることを目指すことが大切である。

また、将来設計能力は、将来の職業や生活について、夢や希望、やりがい・生きがいをもって意欲的に取り組む経験を積み重ねられるように支援していく必要がある。児童が思う存分活動に取り組み、「できた！」「やった！」「楽しかった！」という達成感・満足感・自己肯定感が得られるような経験によって、やりがい・生きがいのある生活につなげていくことができると考える。

④　意思決定能力

児童が個性や能力を生かしてよりよく生きていくために、自分の意思をもって選択し、決定できる能力である。意思決定能力は、自分の好きなもの、やりたいこと、自分に必要な学習などに進んで取り組むことで培うことができる。児童にとって、選択の意味を理解し、自分の意思で判断・決定するということは難しい課題である。しかし、それは将来の夢や希望、よりよい社会生活・進路決定のために必要な能力であり、小学部段階から経験を積み重ねていくことが大切である。遊びの指導や図画工作、音楽、生活単元学習における買い物学習、調理、栽培など、様々な活動場面を活用して意思を表現し、自分で判断・決定する経験が得られると考える。

(4)　キャリア発達と遊びの指導との関連性

知的障害特別支援学校小学部における児童のキャリア発達は、働くことも含め、将来の生活の土台となる基礎的能力をはぐくむ段階である。この時期の遊びは、自分の好きな活動で思う存分楽しく遊ぶことで、充実感・満足感・達成感を味わうことができ、自分が好きなことや自分の良さへの気付きに役立つとともに、人とのつながりをもつ機会となり、楽しさを共有する中で友達の良さや違いを感じ、認め合うことができる大切な役割を果たすものである。その他にも、遊びによって、身体の動きや運動機能、人や物とのかかわり、コミュニケーション能力、認知的な能力、興味・関心を広げ意欲的に活動することなど、様々な能力をはぐくむことができると考える。以上のことから、キャリア発達を促す上において遊びの指導は重要な教育活動であると考える。

(5)　アセスメントシートについて（資料１～資料３）

児童一人一人の実態を、キャリア教育の視点から把握するためのシートである。 キャリア教育にかかわる四つの能力領域を、基礎的能力、さらに具体的な基礎的能力の項目で児童の実態をとらえ、キャリア発達の段階を記入していく。各項目は、児童の姿をイメージしやすいような分かりやすい言葉で表現するよう努めた。また、左側の五つのステップは、具体的な基礎的能力の各項目について、現在のキャリア発達がどのような段階の支援によるのかを考えるものである。

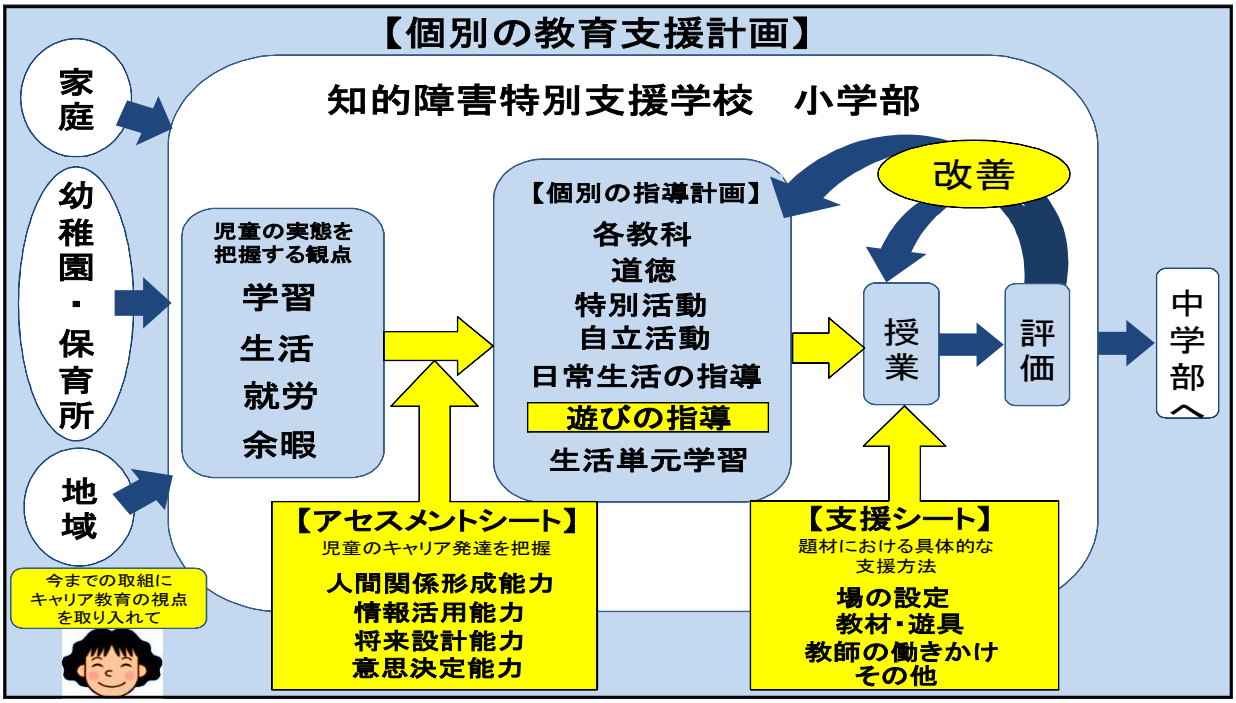
アセスメントシートの下の部分には、遊びの指導で取り組みたいキャリア発達をチェックする欄を設けた。キャリア発達と遊びの指導との関連性を確認することによって、キャリア教育の視点に立った遊びの指導の目標を設定できるようになっている。

(6)　支援シートについて（資料４、資料５）

遊びの指導の授業実践において、児童一人一人の具体的な支援方法を考えるためのシートである。アセスメントシートによって設定された児童の遊びの指導の年間の目標に沿って、題材ごとに主に「場の設定」、「教材・遊具」、「教師の働きかけ」の三つの観点から具体的な支援方法を記入していく。

その際、児童の好きなことや得意なことなどを生かしたいと考え、「支援に生かしたいキャリア発達」の欄を設けた。そして、各支援方法がキャリア発達の四つの能力領域のどれに関連するものなのかを記入することで、キャリア発達を促すことへの有効性という視点で評価できると考える。また、１単位時間ごとに児童の取組の様子と支援方法の有効性を振り返ることで、児童のキャリア発達を促すためのよりよい支援方法を考えていくことができる。

２　研究構想図



Ⅴ　研究の計画と方法

１　聞き取り調査

実施時期	平成24年６月～７月
対　　象	県内の知的障害特別支援学校（３校）小学部　小学部主事　３名
内　　容	・キャリア教育についての具体的な取組例 ・校内での協力体制（小学部・中学部・高等部の連携） ・家庭や地域への情報発信の方法及び内容

２　研究授業実践の概要

対象学級	協力校（知的障害特別支援学校）小学部
実践期間	平成24年９月～10月　　全５時間
題 材 名	遊びの指導　「ゴーゴーランドで遊ぼう」
題材の目標	教師や友達の誘いや遊ぶ様子を見ることにより、教師や友達と一緒に遊具で遊んだり、身体を動かして遊んだりする。

３　抽出児童

Ａ児	言語によるコミュニケーションができ、日常生活の中で積極的に教師や友達と会話する。日常生活の身辺処理はほぼ自分でできる。場に応じた会話や行動については、事前の確認やその場で教師が言葉をかけるなどの支援が必要である。日常生活や遊びの指導でのルールは、教師が事前に伝えたり経験を重ねたりすることで理解し、守ることができる。
Ｂ児	教師の指示理解はできるが、言語によるコミュニケーションが難しく、指さしや身振りで自分の意思を伝える。身体機能的に未発達な部分もあり、表現できる身振りは少ない。日常生活の身辺処理は教師の支援が必要である。教師や友達に積極的にかかわろうとする意欲はあるが、自分の思いをうまく伝えられず、不適切な行動で表現してしまうことがある。

4　検証計画

過程	検証の観点	検証の方法
見通し1	【キャリア教育の視点を取り入れた児童の実態把握】 ・キャリア教育にかかわる四つの能力領域において、具体的な基礎的能力を記述したアセスメントシートを活用したことは、児童のキャリア発達を的確に把握するために有効だったか。	・アセスメントシートに記述された具体的な基礎的能力の各項目を五つのステップで考察し、児童のキャリア発達を分析する。 ・学級担任を対象とする授業後の振り返りアンケートを考察する。
見通し2	【キャリア発達を促す観点からの目標設定】 ・アセスメントシートの具体的な基礎的能力の各項目について、遊びの指導との関連性を記入したことは、キャリア教育の視点から遊びの指導の目標を設定するために有効だったか。	・アセスメントシートで把握したキャリア発達と、遊びの指導において取り組みたい項目を分析する。 ・学級担任を対象とする授業後の振り返りアンケートを考察する。
	【支援シートの活用】 ・支援シートを活用して、主に「場の設定」、「教材・遊具」、「教師の働きかけ」の三つの観点から支援方法を考えたことは、児童のキャリア発達を促すために有効だったか。	・「場の設定」、「教材・遊具」、「教師の働きかけ」の観点で支援方法を考察すると共に、授業での児童の様子をビデオに録画し分析する。 ・学級担任を対象とする授業後の振り返りアンケートを考察する。
見通し3	【キャリア発達を促す支援方法の有効性】 ・支援シートを活用して実践した授業において、工夫した支援方法が、児童のキャリア発達を促すために有効だったか。	・授業での児童の様子をビデオに録画し分析する。 ・学級担任を対象とする授業後の振り返りアンケートを考察する。

Ⅵ　研究の結果と考察

1　児童の実態を把握する過程で、キャリア教育の視点から作成したアセスメントシートを活用したことにより、児童のキャリア発達にかかわる具体的な基礎的能力を的確に把握できたか。

(1)　アセスメントシートを活用したキャリア発達の把握

まず、協力校の学級担任２名に、児童一人一人のアセスメントシートを記入してもらった。次に、それらを照らし合わせながら話合いを行った。表１は、学級担任２名分を合わせたものの一部である。この表から、児童の実態のとらえ方が教師によって異なることが分かった。これを基に具体的な基礎的能力の各項目について話し合い、キャリア発達を確認した。

授業実践後の学級担任に行った振り返りアンケートでは、「四つの能力領域ごとに具体的な基礎的能力の項目があり、児童の実態を具体的にとらえることができた」「五つのステップで考えることによって、児童のキャリア発達をとらえることができた」という感想を得た。

これらのことから、具体的な基礎的能力の項目と五つのステップを設けたアセスメントシートの活用が、児童のキャリア発達を的確に把握する上で有効であることが分かった。

表１　Ａ児のアセスメントシート（一部）

キャリア発達にかかわる四つの能力領域		人間関係形成能力							
基礎的能力		自己理解		他者理解			協力・共同 集団参加		
具体的な基礎的能力		興味のあること・好きなものをもち、増やす	自分の良いところ・得意なことに気付く	友達を意識して活動する	友達と仲良く遊ぶ	友達の良いところや、自分と違うところに気付く	集団活動に参加する	友達と一緒に活動する	友達と協力して活動する
ステップ ①	教師や家族と一緒に								
②	教師や家族の支援で								
③	教師や家族の一部の支援で		○		○	○		○	○
④	自分から進んで	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤	見通しをもって最後まで、適切に	○		○			○		

注：○は学級担任①、○は学級担任②のチェック
表１だけでは見られないが、２人の学級担任で同じステップに○が付いた項目もある。

また、学級担任に行った振り返りアンケートには、「客観的に児童の実態をとらえられた」という感想もあった。アセスメントシートは、一人の学級担任によっても活用できるが、教師間での話合いを併用することで、より客観的に児童のキャリア発達にかかわる具体的な基礎的能力を把握できると考える。

(2)　抽出児童のキャリア発達（資料２、資料３を参照）

Ａ児は、意思決定能力や情報活用能力に関してはステップ④が多いが、人間関係形成能力における他者理解、協力・共同・集団参加の項目についてはステップ③が多い。また、将来設計能力の「身体を動かして遊びや運動に取り組む」の項目についてはステップ③であり、教師の一部の支援が必要な段階である。

Ｂ児は、四つの能力領域のほとんどにおいてステップ①と②が多く、教師の支援が必要な段階である。人間関係形成能力における「友達を意識して活動する」と「集団活動に参加する」については、ステップ③であることから、他者を意識して活動できる児童である。

２　授業を行う過程で、児童の実態に対応した遊びの指導の年間の目標や題材の目標を設定する際に、アセスメントシートに遊びの指導との関連性を記入したことによって、キャリア教育の視点から遊びの指導の目標を設定できたか。

(1)　児童のキャリア発達と遊びの指導との関連性

実態把握と同様に、学級担任２名に記入してもらったアセスメントシートを照らし合わせながら、遊びの指導で取り組みたいキャリア発達について話し合った。そして、◎が付いた項目と、五つのステップのうち支援が必要な項目を対応させてとらえたことによって、児童のキャリア発達と遊びの指導との関連性が明らかになった（表２）。

表２　遊びの指導との関連性を記入した
Ａ児のアセスメントシート（一部）

キャリア発達にかかわる四つの能力領域		人間関係形成能力							
基礎的能力		自己理解		他者理解			協力・共同 集団参加		
具体的な基礎的能力		興味のあること・好きなものをもち、増やす	自分の良いところ・得意なことに気付く	友達を意識して活動する	友達と仲良く遊ぶ	友達の良いところや、自分と違うところに気付く	集団活動に参加する	友達と一緒に活動する	友達と協力して活動する
ステップ ①	教師や家族と一緒に								
②	教師や家族の支援で								
③	教師や家族の一部の支援で		○		○	○		○	○
④	自分から進んで	○		○			○		
⑤	見通しをもって最後まで、適切に								
遊びの指導で取り組みたいキャリア発達（◎は主なもの、○は関連するもの）		○	○		◎	○		◎	◎
遊びの指導における年間の目標		・友達に働きかけたり、誘ったりして一緒に遊ぶ。							

(2)　児童の遊びの指導における目標

キャリア発達と遊びの指導との関連性から、２名の抽出児童共に、人間関係形成能力と将来設計能力、意思決定能力に関して課題があることが分かった（資料２、資料３を参照）。

その後、個別の指導計画の目標と照らし合わせながら話し合い、特に人間関係形成能力の「友達と仲良く遊ぶ」「興味のあること、好きなものをもち、増やす」、将来設計能力の「身体を動かして遊びや運動に取り組む」に関する遊びの指導の年間の目標を確認、及び修正をした。そして、それを基に本題材「ゴーゴーランドで遊ぼう」の目標を設定した（表３）。

学級担任に行った振り返りアンケートでは、「アセスメントシートに、遊びの指導において取り組みたいキャリア発達に◎を入れただけで児童の課題が見え、目標が立てやすかった」「支援をすべき点が具体的に考えられた」という感想を得た。

表３　学級担任と話し合った、抽出児童のキャリア発達と遊びの指導における目標をまとめたもの

	遊びの指導における現在のキャリア発達	遊びの指導における年間の目標	本題材の目標
Ａ児	・教師の一部の支援によって、友達と一緒に仲良く遊んでいる。【人】 ・教師の一部の支援によって、身体を動かして遊んでいる。【将】	・友達に働きかけたり誘ったりして一緒に遊ぶ。 ・身体を思う存分動かして、楽しく遊ぶ。	・教師の言葉を聞いて、友達を誘って遊具で遊ぶ。 ・教師の誘いを受け入れたり教師や友達が遊ぶ姿を見たりして、身体を動かして遊ぶ。
Ｂ児	・教師の支援によって、友達と一緒に遊んでいる。【人】 ・教師と一緒に、身体を動かして遊んでいる。【将】	・いろいろな素材や道具、遊具を使って友達と遊ぶ。	・教師の誘いを受け入れて、友達と遊具で遊ぶ。 ・教師と一緒に身体を動かして遊ぶ。

注：【人】は人間関係形成能力、【将】は将来設計能力

３　授業を行う過程で、支援シートを活用して、主に「場の設定」、「教材・遊具」、「教師の働きかけ」の三つの観点から支援方法を考えたことにより、児童のキャリア発達を促すことができたか。

(1)　支援シートの活用方法

本題材の各時間の前に、支援シートを活用して学級担任と話合いの場を30分～１時間程度設けた。児童のキャリア発達との関連性からとらえた遊びの指導の目標を確認しながら、「場の設定」、「教材・遊具」、「教師の働きかけ」の観点から支援方法を考えた（表４）。そして授業後には、児童の遊びの様子を振り返り、支援方法の有効性を検討した。改善の必要な支援方法は、その都度支援シートに加筆・訂正していった。

学級担任に行った振り返りアンケートでは、「支援シートによって、実際に授業に活用してみて有効だった支援、有効でなかった支援を振り返りやすかった」「四つの能力領域ごとにどのような支援が必要であるかが整理でき、具体的な支援方法を考えやすかった」「児童一人一人に作成することで、同じ遊具でも児童によってねらいが違うことが分かった」「児童の遊ぶ様子に応じて、段階を踏んで支援方法を考えられた」などの感想を得た。

表４　Ａ児の支援シート（一部）

		人間関係形成能力
題材の目標		◎ 教師の言葉を聞いて、友達を誘って遊具で遊ぶ。
支援に生かしたいキャリア発達		・教師には自分から進んで話しかけたり、かかわって遊んだりする。 ・教師の言葉かけで、友達に声をかけたり物を介して働きかけたりすることもある。
支援方法	場の設定	意欲的に遊べるように、台車にスロープとトンネルを組み合わせて設置する。
		いろいろな遊具に目を向けやすいように、スロープと迷路を近くに設置する。風船も近くに置く。
		さらに迷路に興味をもち、且つ身体を動かして遊ぶ姿が増えるように、途中で迷路を付け足す時間（合体タイム）を設ける。
	教材・遊具	友達と一緒に持って遊べるように、バルーンを活用する。
		風船バレー用に、割れにくい素材の風船を用意する。
		友達と一緒に乗れる大きさの台車を用意する。
		友達の様子が見えたり声をかけたりできるように、迷路に小さな窓を付ける。
	教師の働きかけ	いろいろな遊具を使って、教師も一緒に楽しく遊ぶ。
		台車でスロープを滑るときには、「３，２，１，スタート！」など、かけ声をかけて楽しい雰囲気を作る。
		友達を意識できるように、教師が友達の名前を呼びながら遊んだり、友達の遊びの様子を言葉で伝えたりする。
		友達と遊ぶときには、友達の名前を呼んでみるように言葉をかける。
		台車に乗るときは、教師が「一緒に乗る？」と聞いて他児童も誘ったり、A児に「～を誘ってみたら」や「だれと乗る？」と聞いたりする。

(2)　場の設定の工夫

本題材では、教師や友達が遊ぶ様子を見ること、友達を誘うこと、誘われることなどを通して、いろいろな遊びを経験でき、児童の遊びの幅を広げることに役立つと考え、一つの遊具に限定せず三つの遊具を取り入れて場の設定を工夫した。また、児童の興味・関心の違いを考慮し、一つ一つの遊具の楽しさを知ってほしいと考え、遊具を風船、台車、迷路の順に１時間ごとに増やしながら遊びの場を設定した。

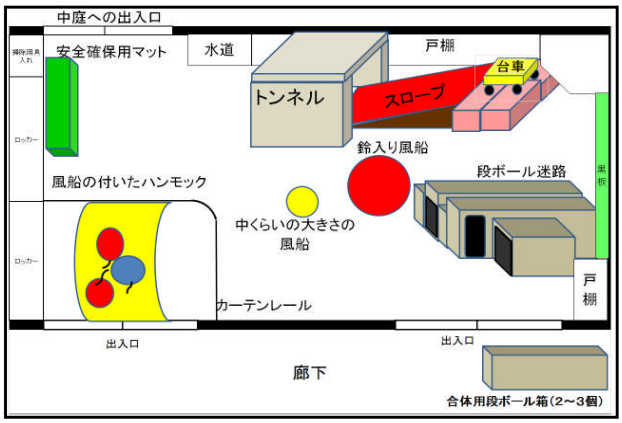


図１　遊具配置図

具体的には、風船を使って身体を動かして遊べるように広いスペース、高いところにハンモックを設定した。台車については、興味をもってより楽しく遊べるように、スロープとトンネルを組み合わせた。また、いろいろな遊具に目を向けて遊べるように、迷路とスロープを近くに設置し、風船も近くに置いた（図１）。

(3)　教材・遊具の工夫

１時間目は、風船のみを用意した（図２）。児童は風船を投げる、打つ、蹴るなど、身体を動かして遊んだ。ただし、教師とのかかわりや一人遊び

図２　１時間目の風船

図３　２時間目の風船

図４　３時間目以降の風船

が主であり、友達とかかわって遊ぶことはほとんどなかった。また、風船の数や種類を徐々に増やしたことにより、風船を使って身体を動かして遊ぶことから、風船を割って遊ぶことに児童の遊びの様子が変化していった。授業後の話合いでは、「友達を誘って遊ぶ」「身体を動かして遊ぶ」という目標を支援シートでもう一度確認し、２時間目以降は風船の数を減らしたり、割れにくい素材の風船や大きな風船を取り入れたりすることにした（図３、図４）。

台車は、友達と一緒に乗れる大きさの物を用意し、台車で通ったときに音が出るように、鈴を付けたトンネルを設置した（図５）。迷路は、四つばいの動きで遊ぶ姿が自然に生じるように、段ボールをトンネル状にして設置した（図６）。また、友達の遊ぶ姿が見えたり声をかけたりできるように、途中に小さな窓を設置した。初めて設置された３時間目は、２名の児童共に迷路でたくさん遊ぶ姿が見られたが、４時間目には、２名とも迷路で遊ぶ時間が減っていた（図７、図９）。授業後の話合いでは、遊具を増やすことも検討したが、児童のキャリア発達や本題材の目標をもう一度確認した結果、遊具を増やすのではなく、児童がもっと興味をもって楽しく遊ぶために遊具を改良することが支援シートに加えられた。具体的には、さらにわくわく感をもって遊べるように、秘密の扉を付けたり、授業の途中で迷路を付け足したりした。

図５　台車とトンネル

図６　迷路

(3)　教師の働きかけの工夫

遊びの指導における一番大切な教師の姿勢は、児童と同じ立場に立って一緒に楽しく遊ぶことである。これは、本題材において支援方法を考えたり授業後の振り返りをしたりする際に、毎回学級担任と確認し合った。安全面は配慮するが、児童の遊びをなるべく制限せず、児童から出された自由な発想の遊びを受け入れ、教師も一緒に遊ぶように心がけた。

児童が友達を意識して一緒に遊べるための支援方法は、教師が児童の名前を呼んで誘い手本を示したり、友達に目が向くように友達が遊ぶ様子を言葉で伝えたりしたことである。また、Ａ児には「誘ってみたら」や「近くに行って肩をたたいて呼んだら」「だれと乗る？」などの言葉をかけながら一緒に遊んだ。

４　検証を行う過程で、遊びの指導でどのように児童が活動したかを支援シートに書かれた目標と照らし合わせて振り返ることで、取り入れた支援方法が児童のキャリア発達を促すために有効だったかを明らかにできたか。

(1)　抽出児童（Ａ児）の様子

図７は、Ａ児の授業中の様子をビデオで撮影し、題材の１時間ごとに三つの遊具それぞれで遊んだ時間を計測してその割合を示したグラフである。

図７の①～③では初めて設定された遊具で遊ぶ時間が多く、④ではその他が増えている。Ａ児は初めて設置された遊具には興味をもつが徐々に飽きていく傾向があると考えた。そこで、支援方法の工夫として、秘密の扉を付けたり、授業の途中で迷路を付け足したりした。⑤では迷路で遊ぶことが前時より増えたことから、遊具への工夫が有効だったことが分かる。

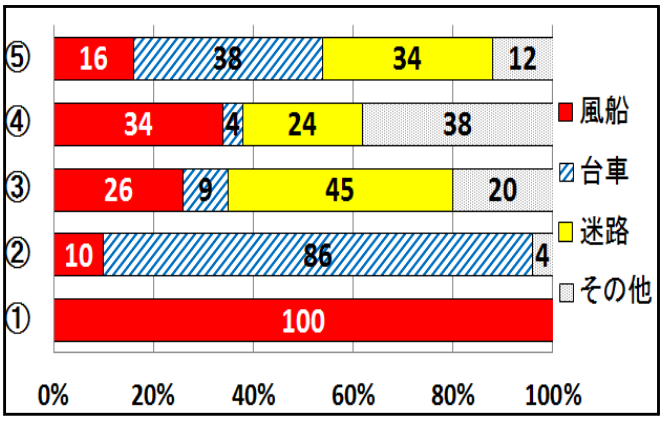


図７　Ａ児が遊んだ遊具の割合
注：①～⑤は１時間目～５時間目

また、Ａ児は②から風船で遊ぶことが徐々に増えている。実際の場面では、「Ｂ児についていく」

と言って遊びを台車から風船に変えたり、「Ｂ児がいないとつまらない」と言って風船で遊ぶＢ児と教師の中に混ざって遊んだりする姿が見られた。このことから、遊びの対象が徐々に教師から友達へと変化していったことが分かる。

図８はＡ児が友達に声をかけた回数と友達を誘った回数を示したグラフである。このグラフを見ると、風船だけで遊んだ①では、Ａ児が友達とかかわって遊ぶことがなかったが、②ではＡ児が自分から友達に声をかけて台車に誘う姿がたくさん見られた。このことから、友達とかかわって遊ぶための遊具として、友達と一緒に乗れる大きさの台車を活用したことが有効だったことが分かる。

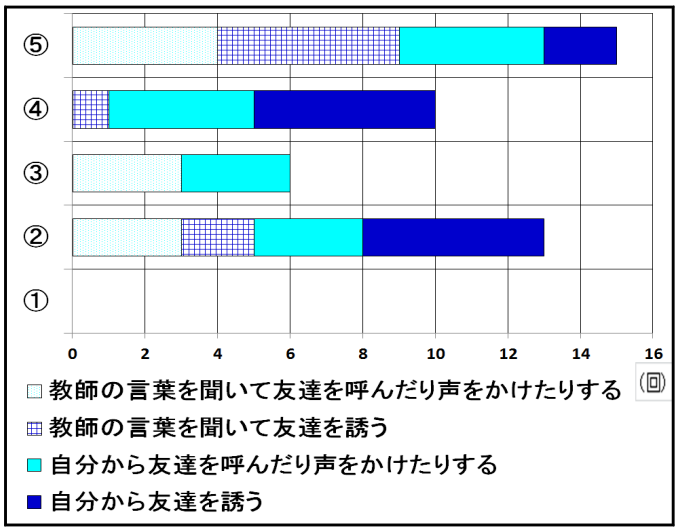


図８　Ａ児が友達に声をかけたり誘ったりした回数

しかし、③では友達を誘う姿が見られなかった。これは、③で迷路が初めて設置されたことにより、台車で遊ぶ姿が減り（図７③）、友達を誘う姿が見られなかったからであると考える。そこで、支援シートで考えた「教師の働きかけ」の支援方法をもう一度確認し、学級担任間で意識して支援に当たるようにした。図８の③～⑤を比較すると、Ａ児が友達を呼んだり声をかけたり、友達を誘ったりすることが徐々に増えている。教師の言葉かけの工夫が有効だったと考える。

(2)　抽出児童（Ｂ児）の様子

図９①～③から、Ｂ児も初めて設置された遊具には興味をもって遊ぶ姿が見られた。しかし、全体として風船を好み、自ら風船を指さして遊びたいことを伝えることが多かった。その要求にこたえ、教師も一緒に楽しく風船で遊んだことで、風船を投げる、打ち合う、大きな風船の上に腹ばいで乗り揺れる感覚を楽しむ、ハンモックにつるした風船を両手で打ち上げるなど、たくさん身体を動かして遊ぶことができた。教師と一緒に身体を動かして遊ぶために、風船は有効だったと考える。

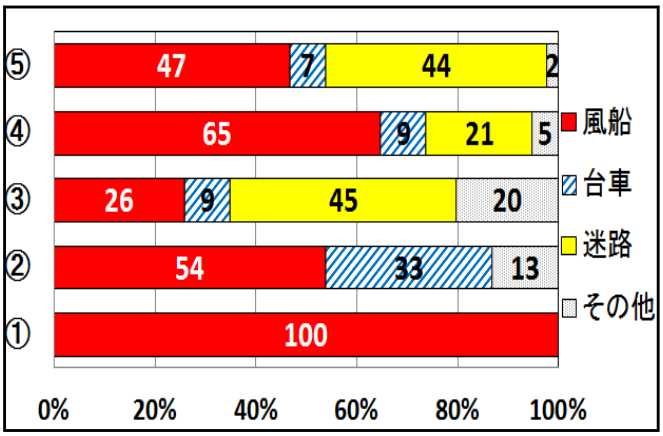


図９　Ｂ児が遊んだ遊具の割合

友達と遊具で遊ぶことに関しては、迷路がとても有効だった。図10はＢ児が迷路で遊んだときのきっかけを回数で表したグラフである。このグラフから、Ｂ児は迷路では教師の誘いよりも友達が遊ぶ様子を見て遊ぶことの方が多いことが分かる。授業中の様子を録画したビデオでは、友達が迷路に入る姿を追いかけてＢ児も迷路に入ったり、迷路に設置した小さな窓から友達の姿を見つけて指さしたり、迷路をたたいて友達を呼んだりする

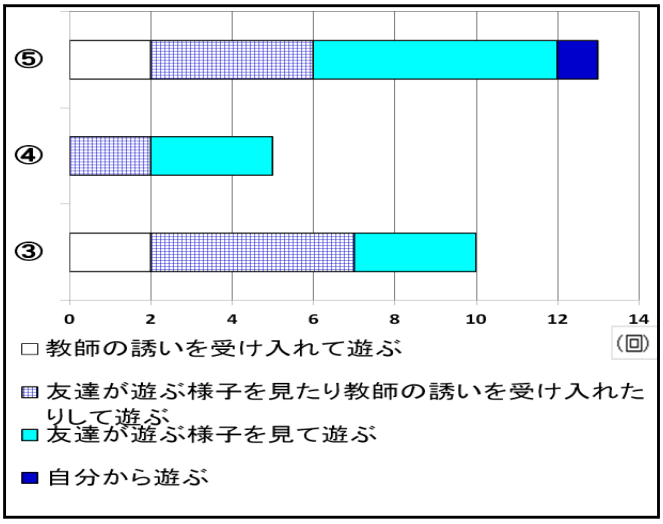


図10　Ｂ児が迷路で遊んだときのきっかけ

姿がたくさん見られた。迷路は、身体を使って遊ぶために役立つだけでなく、友達が楽しく遊ぶ姿を見ることにより、友達に目を向けて一緒に遊ぶためにも有効な遊具だったと考える。

また、図９の⑤では迷路で遊ぶことが④の２倍以上に増えている。秘密の扉を付けたり、授業の途中で迷路を付け足したりして遊具の工夫をしたことにより、友達の遊ぶ姿が活発になり、その姿を見てＢ児も一緒に迷路で遊ぶ姿が増えたと考える。これらのことから、「教師と一緒に身体を動かして遊ぶ」というステップから、友達が遊ぶ姿を見てという「教師の一部の支援によって」のステップにキャリア発達を促せたと考える。

台車遊びでは、教師の「～と一緒に乗る？」という言葉かけによって、回数は少ないが毎時間友達と台車に乗って遊ぶことができた（図９）。また、Ｂ児は一緒に台車に乗らなくても、台車で遊ぶ友達を見たり、「３，２，１，スタート」というかけ声に合わせて両手でリズムをとったりする姿がたくさん見られた。Ｂ児が自分なりの方法で友達に目を向け、台車遊びを楽しんでいた様子だった。さらに本題材では、風船の上に腹ばいに乗って揺れて遊ぶ友達の姿を見てＢ児も同じように遊んだり、風船を迷路の中に入れて遊ぶというＢ児の自由な発想も見られたりした。風船と台車、迷路の遊具を組み合わせたことにより、Ｂ児の遊び方を広げることにも役立ったと考える。

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

○　知的障害特別支援学校小学部児童にはぐくみたい、具体的な基礎的能力を記述したアセスメントシートを活用したことによって、児童の実態をキャリア教育の視点からより多面的にとらえることができ、児童のキャリア発達を的確に把握することができた。

○　五つのステップで児童のキャリア発達をとらえたアセスメントシートに、遊びの指導との関連性を記入したことによって、キャリア教育の視点から遊びの指導の目標を設定することができた。

○　授業における支援方法を考える際に、支援シートを活用したことによって、題材における個別のねらいに対して、支援方法をより具体的に、焦点化して考えることができ、児童のキャリア発達を促すことに役立った。

２　課題

○　本研究では、遊びの指導においてアセスメントシートを活用したが、これは生活単元学習や国語、算数などの教育活動においても、児童のキャリア発達との関連性を把握したり、個別の指導計画の目標を設定したりすることに役立つものである。今後、本研究で実践したことを遊びの指導以外でも活用し、児童のキャリア発達を促すための教育活動を積み重ねながら、他教師及び他学部にも伝達し広めていきたい。

○　支援シートは、児童の実態に応じた具体的な支援方法を考える上では大変役立った。ただ、教師によって児童の実態のとらえ方や支援に対する考え方が様々であり、支援シートを活用して共通理解を図るには時間がかかった。様々な児童の実態を考慮しながら、教師間で児童への支援にどのように連携していくかを調整する必要がある。

＜参考文献＞

・国立特別支援教育総合研究所　編著
『特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック』（2010）
・国立教育政策研究所生徒指導研究センター
『キャリア教育推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』（2004）
・文部科学省『小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き』（2006）
・愛媛大学教育学部附属特別支援学校　著
『将来の「働く生活」を実現する教育－キャリア教育に基づく支援内容・方法の検討－』（2011）